

キリスト教を表す「神道」 – 『西国立志編』 のザビエル伝

西牟田 祐樹

Created on: 2025/10/19

Last Modified on: 2025/10/19

1 序章

中村正直 (中村敬宇) の『西国立志編』は福沢諭吉『西洋事情』、内田正雄『輿地誌略』と共に明治の三書とも称される¹。この『西国立志編』は Samuel Smiles の “Self-Help” の翻訳であり、明治4年 (1871 年) 七月に出版されている。“Self-Help” は自助努力によって成功した人々の短いエピソードを集めた本である。この書のエピソードは西洋の各国から集められたものであるが、その中には日本に関係したエピソードがある。それは第八編二十一話「ザビエル、東洋に航すること」である。

このザビエル伝の中でインド布教について、『西国立志編』に「ポルトガルの王ジョアン三世、インドの領地に、神道を施さんと欲し、ボバージラといえるものを選びしが、病に罹り行くことを得ず、よりてザビエルをもってこれに代えたり」とあり驚いた²。この原文を見てみると “When John III of Portugal resolved to plant Christianity in the Indian territories subject to his influence ...” (p.239)³ となっており、「神道」は Christianity (キリスト教) の翻訳であることが分かる。無理をして意を汲めば「キリスト教の神の道」と展開できるが、「神道」と書いてあれば日本の民族宗教が浮かぶのが普通だろう。中村正直は翻訳時に Christianity の語の意味が分からなかったのだろうか。しかし彼が “Self-Help” の翻訳時に使用し得た辞書には Christianity の訳語が載っている。まず堀達之助⁴による『英和対訳袖珍辞書』(1862)⁵では Christianity は「西教」と訳されている。また、ロブシャイド『英華字典』(1866) では Christianity には “the religion of Christians, 基督之教, 耶穌教, 耶穌道理, 耶穌教門; the term used by the Rom. Catholics, 天主教” とある (vol.1, p.381)⁶。それどころか中村正直は Christianity の意味を理解し

¹(高橋 1966:78)

²『西国立志編』のテキストの引用は西国立志編、サミュエル・スマイルズ著 中村正直訳、講談社、1991 に依る。また、本稿に記載した項数は参考文献に記載の文献での項数である。

³引用は 1896 年版に依る。講談社学術文庫に収録されている渡部昇一のあとがきによると、中村正直が手に入れたのは 1867 年の増補版である。

⁴堀達之助の生涯については吉村昭氏の小説『黒船』に描かれている。

⁵早稲田大学所蔵のものを参照した。

⁶中国語発音は省略した。中村正直はロブシャイド『英華字典』を翻訳して編纂した『英華和訳字典』(1879-1881) の校正を行なっている。

ていたことが『西国立志編』第四編九から分かる。原文で “Temper is nine-tenths of Christianity” とあるのを、中村は「快樂の心は、上帝道において、十分の九を占めたり」(p.168) と訳している⁷。ここでは Christianity に「上帝道」を当てている。(山口 2004:130) によると『西国立志編』では 16 例中 1 例を除いて God は上帝と訳されている。メドハーストによる漢訳聖書 (1850, 1852) では God の訳語として「上帝」が使用されている (ibid:128)。

「神道」という不審な訳語が使われた理由として、以下の事実の影響を検討する必要がある。それは明治 6 年 (1873) 2 月 24 日になってキリシタン禁制の高札が撤去された、つまり『西国立志編』出版時にはまだキリスト教の禁止が続いていたという事情である。艱難辛苦してインドや日本にキリスト教を布教したザビエルを称賛することは、禁教政策からすると都合が悪い記述であり、神道という訳語でカモフラージュしたのではないかという想定である。しかしこの想定は成り立たない。それは同じザビエル伝の最初で “the heroes of the gospel ought not to be forgotten” (p.238) を、「上帝道の豪傑、身をもって道に殉(したが)うこと、もっとも忽略にすべからず」と訳しており、gospel を「上帝道」と訳しているからである。カモフラージュが目的ならば、ここで「上帝道」を用いることはあり得ない。『西国立志編』ではキリスト教の神(上帝)やキリスト教に関連する話題はしばしば現れており⁸、キリスト教関連の話題を徹底的にカモフラージュや削除する意図は見られない⁹。中村正直のキリスト教に対する態度は排除とは程遠く、キリスト教を擁護する立場であった。彼は桂川甫周から蘭学を学び¹⁰、川路太郎、箕作兄弟、福沢諭吉らと共に英国留学を行い、キリスト教に接していた¹¹。そして彼は静岡学問所で E.W. クラーク宣教師と親友であり、その影響もあり、明治四年から匿名でキリスト教擁護の論陣を張り、「擬泰西人上書」(泰西人の上書に擬す)や「西教無無君之弊」を発表した¹²。彼は 1874 年にジョージ・カクランから洗礼を受け、メソジスト教会の信徒になっている¹³。

訳語「神道」が用いられた文脈を考慮すると、それはザビエル伝の冒頭における上帝道の布教に関する記述を前提としている。つまり「神道」の「神」とは「上帝」を指している。ザビエル伝の「神道」は「キリスト教の神の道」の意味だと理解できる。ザビエル伝で「神道」が Christianity の訳語として用いられたのは、God を神と訳するか上帝と訳すかの選択と絡んだ訳語の揺れの影響で生じた、ほんの僅かな綻びである。God は上帝で一貫して訳せていたが、Christianity は訳語の一貫性を保てていなかった¹⁴。それと同時に、現在では「神道」は日本の民族宗教を表す言葉であり、別の語の訳語としては用いられないが、明治初期では

⁷ “cheerfulness” が「快樂の心」に対応するので、ここは「忍耐は、上帝道において、十分の九を占めたり」が正しい。

⁸ (山口 2004:134-135) の参考資料 表 2 に『西国立志編』における神関連表現がまとめられている。

⁹ 『西国立志編』第十二編六にはキリスト教の律法の話、同七には最後の審判の話も含まれている。しかし『西国立志編』は意訳や大幅な省略が含まれている翻訳であり、キリスト教関連の語彙がすべて訳出されているわけではない。例えば “He proceeded to paint several pictures, amongst others a head of Christ, an original conception, life-size, and a view of Bury, …” (p.194) を含む部分は第六編十五のシャープルズの逸話から削除されている。

¹⁰ cf. 中村敬宇『自叙千字文』

¹¹ (高橋 1966:31-35)

¹² (ibid:94-102)

¹³ (ibid:132)

¹⁴ (山口 2004:130) はキリスト教は「上帝道」と表現されているとするが、2 箇所のみ出現中、上帝道と神道が一箇所ずつであるので、完全には一貫していない。ただしザビエル伝の冒頭で上帝道に言及されていたことは考慮に入れる必要がある。

まだ、「神道」は「神の道」として、日本の神々以外に対しても使用し得る余地があった用語であったことが分かる。神道の意味の固定化は明治政府による神道国教化政策の影響を受けて起こったのだと考えられる。

参考文献

- [1] 中村敬宇、高橋昌郎、吉川弘文館、1966.
- [2] 西国立志編、サミュエル・スマイルズ著 中村正直訳、講談社、1991.
- [3] 上帝か神か－明治初年 GOD はいかに表現されたか、山口 隆夫、電気通信大学紀要、vol.16 issue 2、2004.